

さくまぞうざんぼくせきおよびしょかん  
「佐久間象山墨跡及び書簡」

- 指 定 千曲市指定有形文化財（歴史資料） 平成 61 年 1 月 27 日
- 所 在 地 千曲市大字桜堂 268-1 千曲市文化財センター
- 所 有 者 千曲市（関家より寄贈）
- 概 要 佐久間象山墨跡 16 点、同書簡 10 点
- 時 代 江戸時代、幕末（19 世紀）
- 公 開 非公開

桑原地区の関家先代、関長昭（字は子恒、通称新右衛門、初名要朔）は若くして学問を志し、松代藩士を勤めました。のちに藩から名字御免を許され、藩命によって江戸・京都・大阪への往復もしばしばで、佐久間象山と早くから知り合う仲でありました。元来、学問文学の素養も深かったことから象山の墨蹟を入手する機会もあったと考えられ、同家に象山の墨蹟を多く所蔵されている由縁でもあります。

これらの象山の墨蹟を見ますと、象山のものとしてはやや粗雑と思われるものや、印章がないものも見られますが、料紙は一定しているのも、あるいは象山自身が会心のものと思えなかったため、印章を捺押せず、反故にするつもりであったものも含まれているのではと考えられます。

象山の墨蹟で、にせものが多いことも有名ですが、それらはすべて落款印章が整っているのが一般的です。それらと異なる点がかえって真跡であること証明しているようにも考えられます。同家の象山の書簡は、内容においても非常に貴重なものです。

